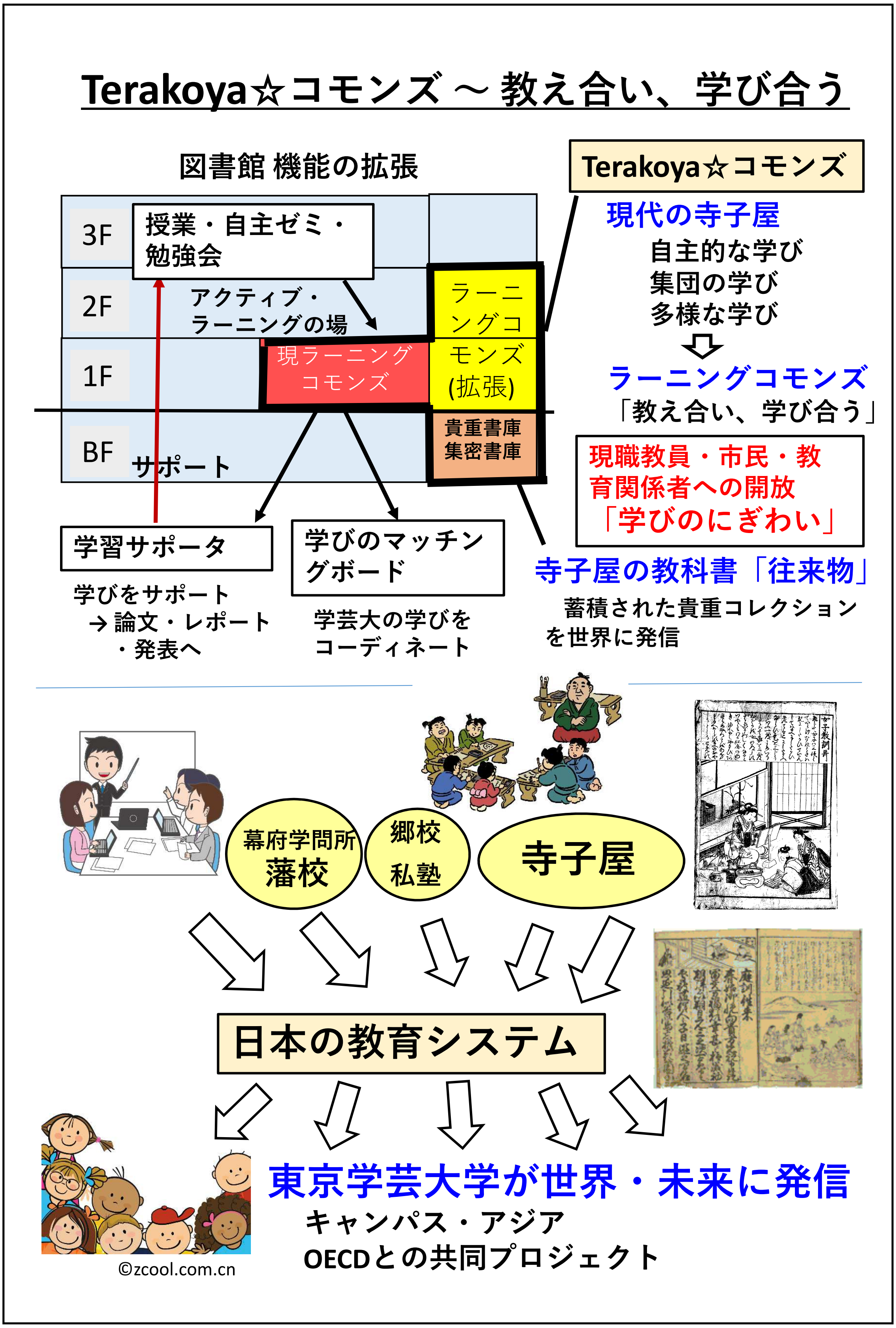
東京学芸大学附属図書館

「Terakoya☆コモンズ」構想

－「教え合い、学び合う」場は時代を超えて－

平成２９年（2017年）１１月

「Terakoya☆コモンズ」構想　概念図



「Terakoya☆コモンズ」構想

――教員養成大学としての特長ある学びへの支援拡大を目指して

附属図書館は、平成 26 年度（2014 年度）の改修工事によりオープンしたラーニングコモンズが活発に利用され早くも狭隘化していることに鑑み、ラーニングコモンズの拡張を含む「Terakoya☆コモンズ」を構想し、実現を目指しています。

構想する「Terakoya☆コモンズ」は、江戸時代の寺子屋の学びと現代のラーニングコモンズの学びに共通点を見出した当館ラーニングコモンズの名称であり、「教え合い、学び合う」営みを通して当館全体の愛称になることも願っています。

構想が実現した場合、1-2 階にはグループ利用者が常に集まりスペースが不足しているラーニングコモンズの機能を拡張します (左ページ参照)。そして、ラーニングコモンズの学びと、自主的な学び・集団の学び・多様な学びである江戸時代の寺子屋の学びとの共通性に着目して「Terakoya☆コモンズ」と名付け、教員養成大学としての特長ある学びへの支援を拡大します。併せて、地階には貴重書庫・集密書庫を整備拡張し、往来物（寺子屋の教科書）や明治期の教科書をはじめとする当館の誇る教育史資料群の活用・発信を通して、広く教育に関心を寄せる人々の学びへの社会的貢献を進める計画です。この構想を通して、現職教員をはじめ広く教育に関心を寄せる人々をも含んだ「学びのにぎわい」を醸し出し、ひいては現代社会の教育力の向上につなげることを願ってやみません。

「Terakoya☆コモンズ」構想について詳しくは、p.2 以下に掲載した 附属図書館長　大石　学（本学教授(歴史学分野)）の一文をご覧ください。

「Terakoya☆コモンズ」構想を実現しよりよいものにするには、学生をはじめとする利用者の皆様の声が欠かせません。附属図書館での学びについて、ラーニングコモンズの運用を本学ならではの豊かな学びに結び付けるアイディアについて、ご意見をお寄せくださいましたら幸いです。

（現在、実現を目指し国に要求を続けている事業です。）

平成 29 年（2017 年）11 月

東京学芸大学附属図書館

Terakoya☆コモンズの挑戦―教え合い、学び合う―

附属図書館長　大石　　学

（本学教授(歴史学分野)）

◆転換期の大学図書館

今日、大学図書館は大きな転換期を迎えています。かつて図書館は、「鎖された巨大な知の収蔵庫」でした。図書館は、「知」を基礎に、大きな威厳をもち、全体を厳粛な雰囲気が覆っていました。限られた利用者たちは、「知」に対する畏敬の念をもち、会話はもとより、鞄のファスナーの音にも気を使い、マナーと静寂を大切にしました。図書館に入る時の緊張感や高揚感は、書物に集約された人類の「知の営み」が蓄積される特殊な空間＝「聖域」への畏敬や感謝、喜びの表れでもありました。人類の進化・文明化の指標の一つに、ペーパーレス社会からペーパー社会への移行をあげるならば、図書館はまさにその象徴でした。

しかし、地球規模の情報化・IT 化は、地域・社会のさまざまな分野で壁を壊し、ボーダーレス化を進めています。そのなかで、高度研究・教育機関である大学図書館の機能や役割も変わりつつあります。それは、社会に「開かれた知の創造・発信拠点」への転換です。たとえば、書物に代わる電子ジャーナルは、有料ながら、だれでも、どこでも、必要な知識や情報を入手できるシステムとしてペーパーレス化を進めました。世界中の膨大な知識や情報がネットワークによりつながり、データベース化により検索機能も高まりました。この結果、図書館界の長年の課題であった、雑誌の収蔵スペースの縮小化も可能になりました。すなわち、大学図書館は、「鎖された知識の収蔵庫」から、膨大な知識や情報を共有し利用する「開かれた知の創造・発信拠点」へと、その機能と性格を変えたのです。それは、大学図書館が書物の収蔵数を誇る場から、新たな価値を創造する主体的・独創的な教育研究活動の場へと、大転換することも意味しました。今日、全国の大学図書館では、学生や教職員がさまざま

な企画やイベントに取り組み、グループによるワークショップやゼミナール、話し合いが活発におこなわれています。ときには笑い声が聞こえ、飲み物の持ち込みが許可されたり、ＢＧＭの流れるリラックス空間が用意された図書館もあります。それぞれの図書館が、独自の資源・環境を活かして、個性ある活動を展開し、卒業生や市民などの利用もあわせて、明るく楽しい「学びのにぎわい」の広場となっています。

◆学校教育・教育行政の転換

同様の転換は、学校教育・教育行政の分野でも見られます。これまでの教育・学習は、「西洋モデル」のもと、より早く、より多くの「正解」に到達する能率的・合理的な能力を育てることが優先されました。暗記主義、偏差値主義です。しかし、近代文明の行き詰まりとともに「西洋モデル」は崩れ、世界は「正解」を失っています。こうした状況を前に、日本の教育行政は、２０２０年度以降の次期学習指導要領において、児童生徒が自ら課題を発見し、討論や発表を通して解決の道を考えるアクティブ・ラーニング=「主体的・対話的で深い学び」の重要性を提起したのです。自主的・集団的な学習スタイルです。

◆「江戸の教育」の今日的意義

大学図書館や教育界の転換のなかで、東京学芸大学附属図書館は、「Terakoya☆コモンズ―教え合い、学び合う―」という構想を打ち出しました。これは、教員養成大学附属図書館にふさわしい活動を目指す、という考えにもとづいています。教員養成大学・学部は、これまで個別科学の学問分野の研究成果を、いかに教育の場に生かし、社会化・共有化していくか、という意識や方法のもとで、研究・実践を積み重ねてきました。しかし、新たな状況を迎えて、教員養成の思想・システムの改革が求められています。それは、教育・学習の本質ともいうべき「統一性・画一性」と「個別性・独自性」の新たな両立・共存の追究でもあります。すなわち、学力の底上げ(ボトムアップ)と、個性化・専門化(スペシャライズ)のバランス、ここに今日の教育改革の目標が見えてきます。

そのさい、寺子屋を基礎とする「江戸の教育」が、重要なヒントになるように思います。江戸時代、世界を回り、Far East (極東)のこの国に到達した多くの外国人たちが、社会のモラルや、国民の読み書き算盤の基礎学力・識字率の高さに驚いて多数の記録を残しています。まさに国際的視野

『庭訓往来』

からの「江戸の教育力」の発見でした。もちろん当時の日本は、義務教育ではありません。

「江戸の教育力」を基礎づける初等教育機関の寺子屋では、親子の自由意思のもと、さまざまな年齢で入門する児童に、読み書き算盤という共通の「基礎学力」を修得させ、同時に、児童それぞれの個性や未来に有益な個別プログラム ＝「応用力」の育成がおこなわれました。先に掲げた「統一性・画一性」と「個別性・独自性」の両立は、寺子屋の学習において達成されていたのです。そして、より高いレベルの学問を志す児童や生徒は、公私立の中高等教育機関ともいうべき郷学(郷校)・私塾などで学びました。これらの教育機関は、各々の建学精神のもと、儒学、蘭学、医学、国学、兵学など専門的なカリキュラムが用意され、生徒の自主的な学習を支援しました。さらに、高度な学問を目指す者たちは、国公立の最高教育機関ともいえる幕府学問所や藩校に進み、最新・最高の知識や技術を学びました。なかには、自藩のみならず他藩の藩校や幕府機関で学ぶ者もいました。

『教訓元禄きせかへ』

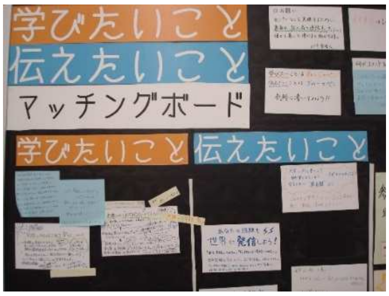
郷校や藩校・幕府学問所では、講義の他に、集団で教え学ぶ読書会やゼミナールなど、今日の大学教育に通じる教育スタイルも広く見られました。この時期、身分や地域を越えて、多数の若者が、江戸、京都、大坂、長崎などに遊学し、自らの課題に主体的に取り組んだのです。

これら「江戸の教育力」は、武力による物事の解決が横行した１００年におよぶ戦国時代を克服して獲得されたものでした。２５０年以上にわたる世界でもまれな「徳川の平和　Pax Tokugawana　パクス トクガワーナ」は、学問・教育の発展をうながす一方、学問・教育が「平和」を基礎づけたのです。今日、先に掲げた「統一性」「普遍性」と「個性」「多様性」のバランスは、「平和」「人権」「環境」など普遍的な価値を共有しつつ、「個人」・「地域」の個性尊重という、人類史的な課題として明確化されつつあります。「徳川の平和」を基礎づける「江戸の教育力」を学ぶことは、たんに過去を懐古することではなく、今日の日本や世界を考える重要な意義をもつのです。

◆「Terakoya☆コモンズ」の挑戦

「Terakoya☆コモンズ―教え合い、学び合う―」は、こうした「江戸の教育力」を意識した構想です。コモンズ(commons)は、所有権のない入会地、共有

地、すなわち「みんなの広場」の意味です。寺子屋を基礎とする「江戸の学び」の基本であるアクティブ・ラーニングは、時代を超えて、学芸大附属図書館のラーニングコモンズ(開放的な学習空間)＝だれもが先生と生徒になる「教え合い、学び合う」「にぎわいの」場へと受け継がれています。ラーニングコモンズには、教育関係図書、教育実習関係図書、児童図書・絵本などが備えられ、授業の予習・復習、ゼミ・サークルの学習など、「教え合い、学び合う」場としての環境も整えられています。



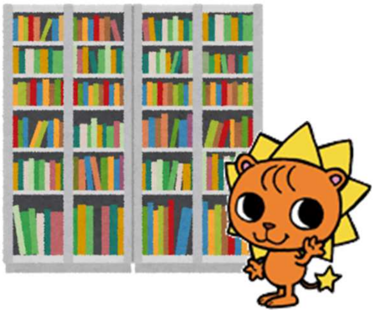
テーマごとに学生が集い合う「学びのマッチングボード」を利用した学びのコーディネートシステム、大学院生が学生の論文・レポートの作成や発表を支援する「学習サポータ制度」などもあります。留学生との交流の場「グローバル・コモンズ」も整備されています。

『江戸名所句合壽古六』

さらに、本学図書館は、収蔵史料によっても江戸時代とつながっています。それは、江戸時代の「手習本(てならいぼん)」(教科書)や遊具兼教材の「絵双六(えすごろく)」など、充実した教育コレクションを所蔵していることです。教育コレクションは、さらに、明治時代の教科書、第二次大戦後の教科書や指導書など、全国的に注目される「教育アーカイブ」として保存・公開体制を整備しています。公開については、デジタルアーカイブを充実化し、アーカイブ関連の展示会や講演会なども開催しています。

これら本学図書館の施設や活動は、国内の図書館や海外の研究者からも注目され、附属学校図書館の企画展示などは、学外で高い評価を得ています。学内組織や団体による企画展示もおこなわれ、他大学や他図書館の関係者の見学も増えています。これらのようすは、最近刊行の「図書館かわら版」をご参照ください。

皆さんには、本学図書館の特長を十分に理解し、存分に利用していただきたいと思います。今日、世界が混沌化するなかで、「江戸の教育力」の延長上に位置する「現代日本の教育力」は、基礎学力、専門性、方法・システムなど、アジア各国、さらには世界各国の注目を集めています。本学図書館での教育・学習体験を通じて、情報リテラシー・教育リテラシーを大いに高め、地域、日本、世界に寄与する「教育力」を養ってください。それこそが本学図書館の使命であり、本学図書館で学ぶ皆さんの使命でもあるのです。



「Terakoya☆コモンズ」構想へのご意見や、附属図書館での学び・ラーニングコモンズ活用のアイディアを募集しています。

図書館１階のラーニングコモンズ入口投書箱、
または当館ウェブサイト http://library.u-gakugei.ac.jp/ へお寄せください。